

Title: Giving God's Way

By Dr. w. eugene Scott, PhD Stanford University

Copyright ©2008 Pastor Melissa Scott; all rights reserved

題名: 主の心にかなう捧げ物

W. ユージーン・スコット牧師、スタンフォード大学博士

Copyright ©2008 Pastor Melissa Scott; 全ての著作権はメリッサ・スコット

ト牧師に属します。

主の心にかなう捧げ物

初穂の実り、捧げ物、十分の一献金

私はスコット博士に、インタビュー形式で最初の実りと捧げ物についていくつか質問をさせてくれなかつたかとお願ひしました。多くの人がなぜ捧げ物を行うべきなのか、きちんと教えられていないと感じたからです。

残念ながら、捧げ物は様々な呼び名にすげ替えられ、チャリティーのような扱いを受けています。人々が捧げ物について怖じ気づくのは、神に向かつて健全な霊の歩みをする上で必要な情報を得てないからです。

現に私も振り返ってみると、捧げ物は常に小銭程度で終わっていました。その後、私はジーン・スコット博士の講義を通して、捧げ物の本来の意味を学ぶ機会に恵まれ、それは思ってもみなかつたほど明快な霊的理解をもたら

してくれたのです。

先生から長年教えを受けてきた方々へ、本冊子がみなさんの学習した知識を、再び新鮮なものにしてくれることを願っています。そして「初めて学ぶ方々」へ、みなさんがいつも疑問に思っていた事項がここで明らかにすることを祈っています。それから最後に、本インタビューを冊子形式に出版できたのは、スコット博士の寛大な承諾を得たゆえであるのを申し添えておきたいと思ひます。

メリッサ・スコット牧師

Q. 初穂の実りという言葉聞いたことのない人がいます。説明していただけますか？

A. 大変簡単です。初穂の実りとは最初の収穫、労働から得る最初の報酬、新年になつてもらう最初の給料、もしくは新しい仕事から受ける初任給です。

Q. 初穂の実りと、十分の一献金／捧げ物とはどう違うのですか？

A. そうですね、それにお答えするにはまず一つ一つがどういった性質のものかを述べていきましょう。十分の一献金は捧げ物と異なります。捧げ物は、主が私たちに所有しても良いと許可された分の中から、自主的に捧げるものです。十分の一献金は「十分の一は……みな主のものである」(レビ記三十七章三十節)ので、私たちのものではありません。これは主のものです。ほと

んどの人々は、自分たちの所有している物は全て自分たちのものだと思っています。キリストの血によって買われた人々は、地球は主のものであり、自分たちは主の所有にあるのを理解しています。神は大変良い取引を私たちに下させているのですよ。私たちが神は主であると認識して、主に属するものを献金することにより、残りの九割を祝福してくださると約束されたのです。マラキ書三章八節によると、献金分を所有している人は盗人であると言っています。

最初の実りも同様に、主に属するものです（出エジプト記二十三章十九節を参照）。初穂料を捧げるのは、神の所有を認知し、私たちの労働から、そして生活から受け取る物、獲得する物は何でも、神からの供給であると認識することであり、それゆえ私たちは初穂の実りを神に捧げるのです。

Q. 初穂の実りの例を旧約聖書に求める場合、どこを見ればいいのでしょうか？

A. では、もつともショッキングな例から始めることにしましょう。イスラエルの民が荒野から約束の地に入り、エリコを攻略した箇所（要するに土地を所有するようになったわけですが）を読むと、まず異様に思われるでしょう。民たちは支配した土地から何一つ、一片の銀も衣も取るのを許されませんでした。その町にある物は全て神に属するもの。なぜならこれは民たちの最初の勝利であり、約束の土地カナンを獲得するに至るまで、これから多数占領していく土地の中で、最初に占領した町であるからです。そして着物の繊維一本でさえも人々の所有を許されなかった。この町そのものが初穂の実りであったからです。全てが主のものでした。

聖書に出てくるアカンという人の最大の罪は、ほんの少しならばいいだろうといくつかの戦利品をテントに隠し持ったことです（ヨシユア記七章）。彼はその見返りとして自分の命、家族の命を失い、はては部族全体が苦しみました。初穂の実りに対する神の姿勢をこれほど強烈に描写した例は他にありません。神の所有権を認識して応じるといふ私たちの姿勢は、神との関係の誠実な反応なのです。私たちは神の所有分を盗んではいけません。私たちは主から祝福を受けて、残りの所有を許されていますが、本来それも主のものなのです。

さてノアは、箱船から出て最初にしたことは、ぶどう畑から収穫した初穂の実りを捧げたことです。初穂は毎年収穫の時期に、主へ捧げられたのです。

初穂を捧げることには恩典の約束がつけ加えられています。それは天の使いが民の前に遣わされ、その年の行く末を守ってくれるというもので、逆に初穂を捧げなかったら、使いは彼らの敵となるとあります（出エジプト記二十三章二十〜二十一節）。聞き従う者にはケーキの上のアイシングのようなものとなり、そむけば恐怖に立ち代わるわけです。

十分の一献金は主のもので、初穂の実りも主に属するというのがシンプルで素直な理解でしょう。私たちの得る最初のもの、一年の初めの週、新しい職について得る最初の給料……は何でも。

初穂の実りは十分の一献金と同じように明快です。（英語の）十分の一献金 *tithe* という言葉は、十分の一を意味します。「初穂の実り」はみなさんが獲得する最初のもので、もし宝くじを買って、当たったとしましょう。そのくじが初めて購入したものであるのなら、賞金は主に属します。

Q. 今、旧約聖書に初穂の例を伺いましたが、では、新約聖書に見られる例は何でしょう？

A. 新約においては、ほとんど問題とされていません。というのはまだその頃には旧約の原理を全部教えられていませんでしたから。理解できるまでに時間がかかりました。信者の内には神の聖霊が宿っていました。聖霊は献身の霊です。実際、第二コリントへの手紙八章で、捧げる行為というのは、純粹に神の聖霊の明確なわざであると語っています。神は喜々として捧げる者を愛されます。神はご自分のひとり子を私たちに与え、そのひとり子はご自分のいのちを捧げたのですから。

もし神の霊が私たちに宿っているのなら、私たちはキリストの心を持っていることになりました。その心は私たちが捧げる者としてくれるのです。新約時代のクリスチャンは何もかも全てを捧げてしまいました！ですからそんな彼らに十分の一献金の話をあえてする必要はありませんでした。と言うのも彼らは所有している一〇〇%を捧げてしまっていたのですから。初穂の裏も教える必要性が出ませんでした。彼らはすでに初穂、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十の裏りを捧げてしまっていました。彼らはすべてを捧げていたのです。

ところで十分の一献金は新約の教義ではないという人がいます。それは間違いです。イエスは十分の一献金について「それも行わねばなりません」と言っておられます（マタイによる福音書二十三章二十三節）。詳細をみれば、パリサイ人らが献金を守り、その分量はことごとく十分の一であった事がわかります。

しかし、新約時代の信者は全財産を捧げていたので、献金について教える

意味はありませんでした。旧約で捧げ物についての教義をしつかりと学習した時、何がわかるかというと、(十分の一) 献金というのは捧げ物の上限を定めているのであり、さらに第一、第二、第三の十分の一献金があるということです。第一の十分の一献金とは、民たちの所有物の10%を捧げるといっても。第二献金は彼らが得た収入の10%、そして第三献金とは三大祭りのために毎年エルサレムへ訪れる資金として、別口に貯蓄された金額です。現在ですと、私たちが礼拝のため、神の家に赴く際に使う雑費やガソリン代などの交通費に相当します。

新約時代のクリスチャンは全てを捧げたのです！しかしこれは神の計画ではありません。主は全てを欲しがってはいませんから。神は十分の一献金を求めています、私たちの所有が認められた分を祝福されたいのです。神は一〇〇%の財産所有は全て呪います。私たちは十分の一献金と初穂の裏りを捧げた後に残る九〇%に対して主の祝福を受けることにより、さらに多くを裏らせることができます。

Q. 捧げ物はずいぶんと歪められてきましたね。先生は過去三十年に渡って、人々に捧げ物の仕方を教えてこられました。できれば、捧げ物とはどういう意味なのかを一言もしくは簡潔にまとめていただけでしょうか？

A. 私たちは生き物であって、生き物には必要とするものがあります。神は創造者で、必要なものがありません。最初に言っておきたいのは——とても残念なことに——教会の多くがあなたがたかも神が欠乏しているかのようにお金を集めています。これは全く恥ずべきことです。「地とそれに満ちているもの、

世界とその中に住むものは主のものである」(詩篇二十四章一節)。神は私たちのお金を必要としません。イエスは弟子たちに集金袋を持たずに行けと言いつけましたが、この袋というのは金銭を請う袋を指し、当時の異教の僧侶たちが持ち歩いていた、彼らの神のためのお布施袋でした。神は私たちが神の乞食になることを望んでおられません。神は供給者なのですから。

C・S・ルイスがこれについて素晴らしい言葉を述べています。創造主である神に必要なものはない。私たち創造物は欠乏だらけです。神はとても寛大で、私たちがもつとも必要とするものを与えてくれたのです——それは私たちが必要とされていると感ずることです。神はご自分の仕事をこなすのに、天使を使えばすむでしょう。私たちがいなくても支障はありません。ところが神は、自らへりくだり腰をかがめて、あえて私たちが主のパートナーとされました。私たちにとって、神、神の言葉、神に仕える機会、これらがいかに重要で大切かを表現する手立てとして、捧げ物させてくれるのです。

さて、ここで十分の一献金と捧げ物の違いをきちんと理解せねばなりません。十分の一献金は神のもの。これは対神との関係において、正直さで迫る肝っ玉がいります。これは私たちが本当に血であがなわれたのか、私たちが自分たちではなく主に属しているのか、これを本当に見極める勇気がいります。これは主が全てのものを持ち主であること、残りの世界は神のテリトリーの不法定住者だという認識を持つ勇気が必要です。私たちはクリスチャンとして、所有者たる主を認め、神は私たちに偽りなく接してくれているのだから、私たちが偽りなく神に対して接していくべきでしょう。私たちが捧げ物をするのは、私たちは主のものであって、地球は主のものである、と認めるからです。主は、十分の一献金と捧げ物を行い、主を讃える私たちを、無条件に祝福してくださると約束してくれている、と私たちは信じています。

捧げ物は十分の一献金を超えたもので、自発的な価値表現です。ガラテヤ書六章には「みことばを教えらるる人は、教える人とすべての良いものを分け合いなさい(ギリシヤ語ではコイノニア)」とあります。霊的な祈りではありません、物——ポルト、家、土地、金、宝石——なのです。神はこれらの物を一切必要としません。しかし神は、私たちに、神が誰であるか、神が私たちに何を成してくれたのかを理解しているという表示をしてほしいのです。全ての捧げ物は礼拝表現であるべきです。(英語で) 礼拝Worshipとは、二つの単語が合わさったもの、Worship(価値)をship(性質)、です。私は昔、とあるエンジニアから、献金は礼拝を「興ざめにするもの」だと言われたことがあります。私は「この人はなんて悪い信仰の基盤を植え付けられたんだろう」と思ったものです。

教会で行う私たちの礼拝行為は、神への感謝を表す誠心誠意の表現で、神の価値を表現しているのです。買い物をするというのは、購入するものに対する価値を表現しています。私たちは汗水流して得たお金を、価値有りと判断した物に対して支払います。真のクリスチャンにとって神と彼のみことばは何にも勝るものです。ですから私たちはこの価値観を、労働の実り、十分の一献金と初穂の実り、そして更に主の所有物以外の中から捧げ物するので

Q. 先生は私の質問にほとんど答えてくださいました。おそらく先生は「そんなことができるかどうか、わからない。初穂の実りに参加できるかどうかわからない」と言う人を多く見てこられたことでしょう。こういった方々に對して先生は何とおっしゃいますか？

A. 神を味方につけて何とかこなしてみるのは、神を敵にまわして自分だけの力でやってみるのと、どちらが良いですか？ 答えは簡単でしょう。換言すれば自分のやり方で進むか、神のやり方で進むか、どちらが良いかですよ。

Q. 先生は、神は喜々として捧げ物をする人を愛する、そして私たちは何かを得ようとして捧げるべきではないとおっしゃいました。しかしほとんどの人が捧げ物について理解していないのが現状です。そういう人々は捧げ物をする時、どこに意識を向け、何を心がけたらよいのでしょうか？

A. 私の答えはこうです。ルカによる福音書十四章で、イエスは全てのものを捨てないと誰も神について行くことはできないと言ひ、その捨てるべきものを列挙しています。すなわち家族、家、土地。しかしイエスはまた逆説的な真実を説いていて、全てを捨てた人は永生だけでなく、この世でも何倍にも受けられるといわれています。

さてここどこがパラドックス（逆説）かというところ、捨てる行為には、見返りに何かを得るという期待が全くありません。しかし、私たちが純粋に神を愛し、大切に思い、神への礼拝表現として、ハードルを飛び越えて捧げ物を行えば、とたんに神の返答を受けます。私はたびたびギリシャ語のフィレオ（相互愛）とアガパオの違いについて教えていますが、アガパオは神が呼び起こすもので、大切なものや価値のあるものに対して見返りを求めずに自己を捧げる愛です。

フィレオは誰もが好きです。私たちは対象を愛して、同じようにその対象

から愛し返される保証つきの愛を好みます。しかし人々が私の心をつかもうと、下心をもって親切にしたら、私は警戒します。ですが仮に私が溺れていて、誰かが自分の命を顧みずに助け出してくれたら、私は戸惑うことなく、その人に信頼をおきます。これがアガパオのもたらすパワーです。逆説的で複雑ですが、神が私たちに計算のない捧げ物をご覧になった時、神は私たちが捧げる以上に豊富に与えてくださいます。これが逆説的な真実です。

神が喜々として捧げる人を愛するのは、彼らが嬉しさのあまり捧げているからです。それはまるで初恋に落ちたような状態であり、またはきらきらと輝く瞳を持つ生まれたての赤ちゃんを我が家に迎えるようなものです。ムチ打たれて捧げ物をするものではありません。愛する者へ捧げ物をするに無上の喜びを見いだすのです。人の心を見透かす神は、愛と礼拝の表現をご覧になり、見返りを期待しない努力を目にします。神はこういった心から誠実に、そして喜びに満ちて捧げる人を愛されるのです。逆説的に言うと、神もまた喜びに満ちてそれに応えてくれるのです。

献金に関連する無条件な約束の一つに、マラキ書は「十分の一をことごとく携えてきて、わたしがあなたがたのためにあふれるばかりの祝福を、あなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ」とあります（マラキ書三章十節参照）。さて、祝福は私たちの定義する祝福とは限りませんが、すべてにおいて善良なる神が与えてくださいます。祝福の意味は、実際に実行してみない限りわかりませんし、何が起ころうとも実行し続けていないと、知ることはできないのです。

Q. 今日の教会世界において、何か一つ先生が目撃したいというものがある

としたら、それは何ですか？

A. 神についての説教の視点を改訂することですね。神が私たちに何をしてくれるのかという教えではなく、神はどういった方であるかという教えでなくてはなりません。

Q. 初穂料、十分の一献金、そして捧げ物はどこに送ればいいのですか？

A. あなたが霊的食物を受ける所に、です。つまり「宝物蔵」（マラキ書三章十節）。人は食事した所で支払いをするものです。

Q. 支払いの宛先は誰の名前にしたら良いのでしょうか？

A. あなたにみことばを教える人へです。

ではスコット牧師、あなたが私の先生です。ありがとうございました。

(了)